山本瀧之助物語

山本瀧之助に学ぶ会実行委員会

均しく是青年なり、而して一は懐中に抱かれ一は路傍に捨てられる、所謂田舎青年とは路傍に捨てられたる青年にして、更にこれを言えば田舎に住める学校の肩書き無く卒業証書なき青年なり、学生書生にあらざる青年なり、全国青年の大部分を占めながら、今や殆ど度外に視られ、論外に釈かれたる青年なり……

「田舎青年」より

＜表紙の写真＞
第 20 回全国巡回講習会で話す山本瀧之助
（1925 年〈大正 14 年〉）10 月 17 日　日本青年会館にて）

も　く　じ

【１】　生い立ち　…… 3
【２】　一生の仕事　…… 4
【３】　「アー　ドウゾ　ネガイ　カナイクダサーレ」の落書き　…… 5
【４】　22 歳で『田舎青年』の自費出版　…… 6
【５】　己（おのれ）に克（か）てよ　…… 7
【６】　はじめての上京　…… 8
【７】　購読無料の『吉備時報』　…… 9
【８】　沼隈郡青年大会へ向けて　…… 10
【９】　全国の注目を集めた沼隈青年会活動　…… 11
【10】　青年団問題を県に直訴　…… 12
【11】　内務省や文部省を動かす　…… 13
【12】　全国青年大会名古屋で開かれる　…… 14
【13】　「足のある学校」の訓導兼校長　…… 15
【14】　『地方青年団体』の出版　…… 16
【15】　指導者にとってヒント満載の本　…… 17
【16】　月刊雑誌『良民』　…… 18
【17】　二万四千部のベストセラー『一日一善』…… 19
【18】　『模範日』・『早起』の出版　…… 20
【19】　「全国巡回青年講習所」開設に向けて　…… 21
【20】　120 回の「全国巡回青年講習会」…… 22
【21】　同窓会と『青年の天地』発行　…… 24
【22】　『山本瀧之助全集』と「頌徳碑（しょうとくひ）」　…… 25
【23】　瀧之助が残したことば　…… 26
※　資料　…… 27～

【1】生い立ち

瀧之助の生家（昭和 10 年ごろ）

山本瀧之助（やまもとたきのすけ）は 1873 年（明治 6 年）11 月 15 日，父山本孫次郎・母サタの長男として沼隈郡草深村（現福山市沼隈町）に生まれました。山本家は，分家する時，譲（ゆず）り受けた 3 反（30 アール）たらずの田畑を耕作する兼業農家でした。瀧之助は，幼い時から体が弱かったのですが，向学心に燃え，熱心に読書し，英語も独学で勉強しました。また，12歳（さい）の時から 2 年間，近くの岡崎朝一先生の漢学塾で勉強しました。小学校を卒業した瀧之助は，中学への進学を希望しましたが，豊かでない家の事情を考え，進学をあきらめました。

やがて草深村戸長役場 (注) へ臨時職員として雇（やと）われるようになりました。当時の日本は市町村制の実施や帝国憲法の発布，帝国議会の開設を目前にひかえ，近代国家へとめまぐるしく変化しようとする時代でした。役場には官報（かんぽう）や新聞・雑誌があり，さまざまな情報が集まる場所であると同時に，夜は村の若者たちが集まり，意見を交流する場でもありました。瀧之助は新聞や雑誌をむさぼるように読み，立身出世のため，上京する夢を募（つの）らせました。

子どものころの瀧之助

（注）戸長役場：明治維新から 21 年間は江戸時代の庄屋の中から戸長が選ばれ，行政事務を行いました。その自宅が役場となりました。

【２】一生の仕事

上京の意志を固めた瀧之助は，世代交代論を主張する志賀重昂に書生(注)として寄宿させてほしいと手紙を出しました。その返事を待つ間に，父孫次郎が学校の先生になる就職の話を持ち帰り，瀧之助に勧めました。しかし，一度決めた上京の夢を捨てきれず，約 10 日間悩み，父母とも話し合いました。父に，「志をかなえてやりたいが悲しいかな，それはできない。父母の気持ちをわかってくれ。」と説得され，ついに 1889 年（明治 22 年）9 月 7 日，15 歳の瀧之助は，村に留まって学校に勤める決意をしました。10 月 14 日，沼隈郡第 14 尋常小学校（現千年小学校）の職員として雇われるようになりました。

瀧之助が最も心を痛めていたことは，小学校を卒業した者が将来の夢や希望を持てないまま「若連中」と呼ぶ若者グループに入り，飲酒・喫煙・野荒し・夜遊びなどをする若者の姿でした。この状況を何とかしなければならないと考えた瀧之助は，1890 年（明治 23 年）役場職員･教師･僧侶などで千年教育談話会(のち好友会)を組織し，時事問題や若連中の現状と若者の生き方などについて意見交換をしました。

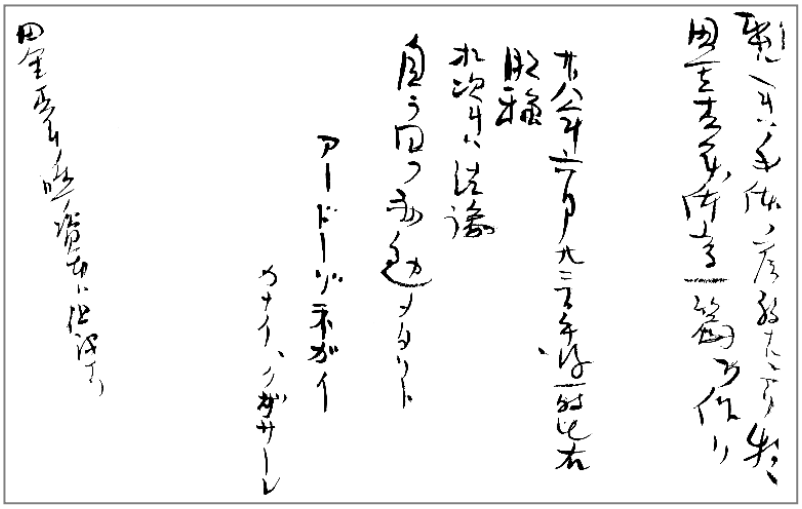
（注）書生：他人の家に世話になり，家事を手伝いながら学問する人

【３】「アー　ドウゾ　ネガイ　カナイクダサーレ」の落書き

1891 年（明治 24 年）松永尋常小学校へ転勤した 17 歳の瀧之助は「青年党」と呼ぶ手書きの雑誌を作り若い仲間たちの間で回し読みをしました。この雑誌には，彼が日ごろ考えていた青年会結成についての熱い思いを述べた文章を載（の）せました。翌年，千年村常石尋常小学校へ転勤すると本格的な本を出版することを考えました。1895 年（明治 28 年）の元旦の日記に，「田舎青年　緒豪（しょごう）ノ為メ必ズ一書を著（あら）ハサン」とあります。

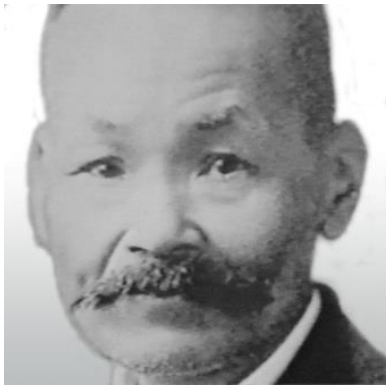
また，その年の旧正月にあたる 1 月 26 日には，近くにある亀山八幡神社に参（まい）り，その後，日の出を拝（おが）もうと境の立石に登り，朝日に輝く瀬戸の海に向かって，『田舎青年（いなかせいねん）』の著作の決意を大声で叫んでいます。

常石尋常小学校への行き返りの時間は，本の構想を練（ね）る時間にあてました。家に帰ると，すぐ思いついたことを書きとめました。6 月に入ると，筆は思うように進まず，あせりで精神的に追いつめられたこともありました。こんな時には，家の近くにある旭観音にお参りし，手を合わせてひたすら完成をお願いしました。11 月には発熱や頭痛・病気に悩まされながらも，この年の 12 月 30 日やっと書き上げました。山本瀧之助記念室に『田舎青年』の草稿（そうこう）・原稿が 15 冊残されています。その中には朱書きで何度も訂正したものや「アー　ドウゾ　ネガイ　カナイクダサーレ」や「神仏助之（しんぶつこれをたすく）」などの落書きがあるものもあり，悲痛な思いで書き上げたことが伝わってきます。



草稿に書かれた落書き

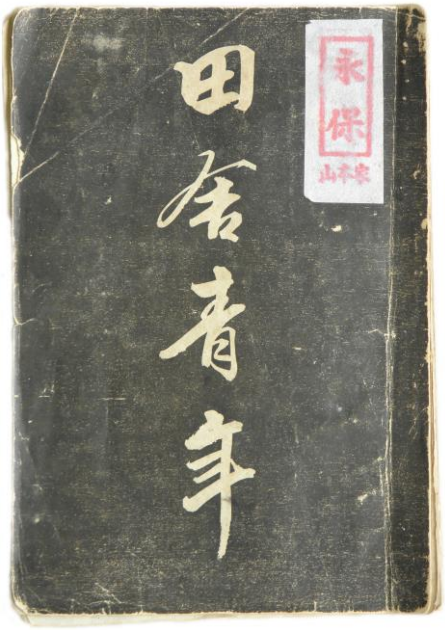
【４】22 歳で『田舎青年』の自費出版



五百木 良三

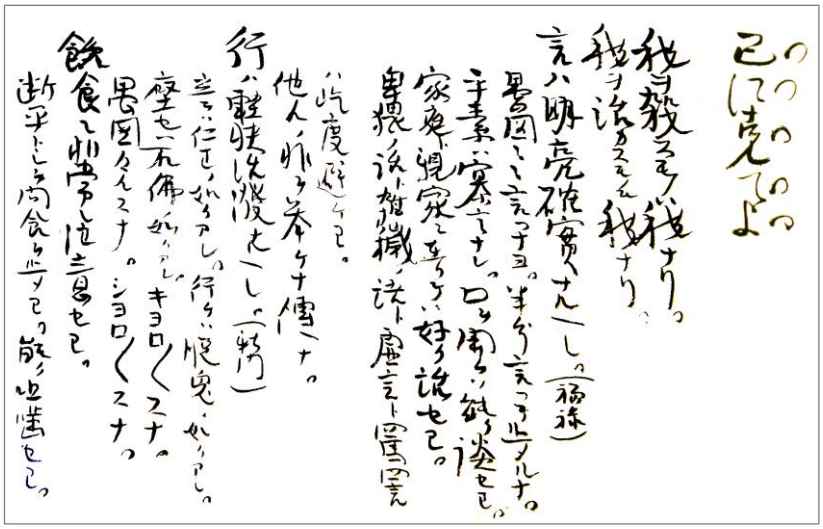
『田舎青年』の原稿を書き上げたものの，出版社や出版費の見込みはまったくありませんでした。漢学塾の岡崎朝一先生に原稿を渡し，出版のめどを付けてもらうことにしました。瀧之助日記 1896 年（明治 29 年）2 月 7 日に，朝一先生から出版の見通しがついたことを伝える大阪からの手紙を手にし「余リ嬉シクテ弁当ヲ忘ル　手紙ヲ繙クコト四度ナリ」と，その喜びを日記に書いています。『田舎青年』が出版されたのは，その年の 5 月のことでした。

当時の風潮は，都会に住む学生・書生が「青年」であり，田舎に住む若者は「青年」とは認められていませんでした。『田舎青年』の冒頭の文章で「均しく是れ青年なり」とその誤りを指摘し，田舎の若者たちが『青年である』との自覚を持つことが大切である。」また，田舎青年を救うには，「青年会を設くべし。青年相集いて一つの団結を作り，相互に注意・忠告・鼓舞・提携・訓練すべし」と説き，さらに全国青年会連合の設立を提案しています。



出版したものの売れ行きは悪く，書評も良くありませんでした。ただ，当時，最も権威がある第一流の新聞「日本」の記者，五百木良三は，「田舎青年の無気力を叱っているが，近代の活気なきは，独り田舎青年のみではなく，中央青年においても同じである。一読に価する本である。」と好意的な評を書き，励ましの手紙を届けてくれました。

【5】己に克てよ



「己に克てよ」の日記（部分）

瀧之助が心血を注いで書き上げた『田舎青年』は結局売れ残り，借金が残りました。借金は田畑を売って返済しました。1896 年（明治 29 年）11 月 29 日の日記に，「八十円 (注) ヲ棒ニフレリ，馬鹿ナコトヲシニケリ」と嘆いています。そのころから母サタの健康状況が悪化し，翌年 1 月 8 日死去しました。その年に，離婚問題が起き，年末には眼病に悩まされ，瀧之助の人生にとって最も大変な時期ではありました。

この状況を跳ね除けようと 1898 年（明治 31 年）の元旦に，「己に克てよ」と題する一文を日記に書いています。「我ヲ殺スモノハ我ナリ，我ヲ活カスモノモ我ナリ」ではじまり，「キョロキョロスナ　愚図々々スナ　ショロショロスナ」と続き，「要スルニ己ニ克テヨ」と自己を励まし，奮い立たせようとしています。

翌年の暮れには，五百木の所属する新聞「日本」に，沼隈生（瀧之助のペンネーム）の名で「日本青年会設立の議」と題する一文を投稿，新聞の愛読者で紙上青年会の設立を呼びかけました。その結果，約 500 人の加入申込みがあり，やがて会員達が各地で会合を開き，交流するに至りました。これが瀧之助が全国的な青年会をつくる運動の最初でした。

（注）八十円：当時瀧之助の月給は 5 円でした。80 円は，その 16 倍にあたります。

【６】はじめての上京

瀧之助の上京が実現したのは，『田舎青年』を新聞に紹介し，はげましの手紙を届けてくれた新聞「日本」の記者，五百木良三の招きによるものでありました。上京して眼病の治療を受けることを勧められ，27 歳になった 1901 年（明治 34 年）9 月下旬に出発，翌年 5 月 29 日に帰郷しました。

瀧之助が東京で勤めた医海時報社

東京では，眼病治療をしながら，医学雑誌「医海時報」社に勤め，ここで出版に関するノウハウを学ぶことができました。また，上京中に多くの人々と知遇を得ることができました。陸軍軍医総監の石黒忠悳や今津出身で出版業を営む河本亀之助などは，生涯，公私にわたり，世話になった人々です。また，松永尋常小学校の教え子であり，後に警視総監となった丸山鶴吉と東京で再会し，さらに深い関係をもつことになりました。そして，病気の正岡子規を根岸の自宅に見舞ったのも，この上京中のことでした。

帰郷した瀧之助をふるさとは温かく迎え入れ，常石尋常小学校に復職しました。8 月には，「医海時報」社で経験したことを生かし，次の仕事の一歩を踏み出しました。それは，個人雑誌『吉備時報』を発行することでした。

【７】購読無料の『吉備時報』

吉備時報

第四號目次

社說

改題の辭

『吉備時報』は第4号からの名称です。創刊は，『沼隈時報』で，瀧之助 28 歳の 1902 年（明治 35 年）8 月から 1912 年（大正元年）3 月までの 10 年間，全 95 号まで発刊した月刊誌で，執筆，編集，資金集めをすべて瀧之助が行いました。

内容は，地方に暮らす人々に有効な情報の提供を念頭に，教育・宗教・衛生・文学・農工商業など多方面にわたり，時には昔話や伝統行事の記事も掲載（けいさい）しました。また，「論説（ろんせつ）」の欄（らん）を設け，青年の生き方や若連中の現状，青年団体の組織化など瀧之助の思いや主張を率直に述べました。1 回の発行は 500～800 部，購読料は無料とし郵送などで配布しました。

発行の経費は広告料で補（おぎな）うため，日曜日ごとに各地へ広告を取りに駆（か）け回っています。『吉備時報』第 21 号の「日曜日と足」という記事には「一頁（ページ）の広告アテに雨中を三里 (注) 行くもモノにならず」「尾道に行き店頭にオジギ幾十回　広告予定に達す」とあります。購読料を無料にしたのは，読者に負担をかけたくないという思いと，個人雑誌としてあくまでも自由に主張を書きたいという思いが強かったからと考えられ，苦しい中にも充実した日々を過ごしました。

（注）三里：1 里は約 4km，3 里は 12km

【８】沼隈郡青年大会へ向けて

今津河原で開催された第１回沼隈郡青年大会

1904 年(明治 37 年)12 月,『吉備時報』第 27 号の記事に若連中の改善策として,「一村内多数孤立対抗せるものを連合せしめ,合同せしむる途を講ずる」とあり，1905 年(明治 38 年)2 月，第 30 号に「先ず若連中なるもの大同団結を計り（中略）手始めとして一郡青年会を組織せんことを」と述べています。

この考え方は 8 年前の『田舎青年』で若連中を夢や希望を持たない乱れた生活をする集団と非難した考え方と明らかに違います。『吉備時報』では若連中の優れた機能や可能性を生かしながら，これを改善し，有意義な団体（青年会）に変えていく主張に転換しています。この変化は 1894 年（明治 27 年），瀧之助自身が新たに設立した「千年少年会」や青年会の運営が行きづまるなどの現実に直面したことによります。

1903 年（明治 36 年）瀧之助は千年村の若連中を改善,「千年村青年連合会」として組織し直し，同年，沼隈郡長市来圭一に郡内若連中の改善を訴えました。さらに翌年，新たに郡長になった阿武信一の支援を得て，2 年後には沼隈郡内すべての町村に「青年会」を組織することができました。1907 年（明治 40 年）全国に先がけ「沼隈郡青年大会」を今津河原で開催することになりました。

青年大会の式典では，優良青年会の表彰が行われ，余興として陸上競技・柔道・剣道などが行われました。集まった人は一般の見物人も合わせ，1 万人にのぼったといわれています。

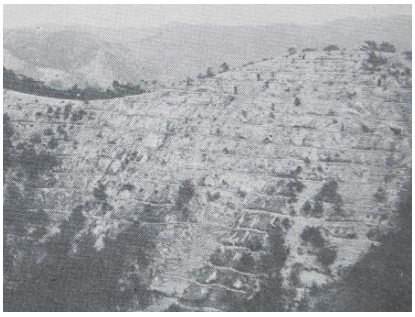
【９】全国の注目を集めた沼隈郡青年会活動

1910 年（明治 43 年）沼隈郡青年会が発行した写真帳に当時の青年会活動が掲載（けいさい）されています。荒地開墾，村道改修，砂防工事，消防ポンプの購入による消防活動，遭難船（そうなんせん）の救助訓練などを紹介しています。明治維新から 40 年あまり経過していますが，行政的施策が不充分だった時代に青年たちは実に幅広い活動を行っています。若連中時代の夢を持てなかった生活が，青年会の力によってここまで変わるものかと驚きを感じさせられます。

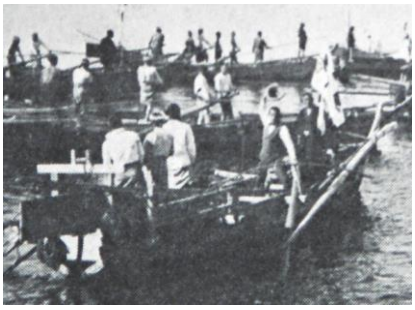
道路の補修工事（山手村）

消防ポンプの購入（千年村 常石）

写真帳の巻末に，町村の青年会準則が示され，その第４条に青年会の活動内容が 14 項目示されています。上記の内容以外に，補習教育，実業教育，図書縦覧所（じゅうらんしょ）及び倶楽部（くらぶ）の設立，農業水産業の発達を補助するなどがあります。これらの準則は，瀧之助が『吉備時報』で論じた青年会の交友機能，教育機能，自治自営機能を具体的に活動内容としたものです。沼隈郡のこうした活動は，やがて全国の注目を集め，青年会の組織化が広まっていきました。



山林の植林（山南村）



遭難船の救難訓練（走島村）

（注）　沼隈郡：当時の沼隈郡は２町 28 村で，沼隈半島と島々です。その範囲は芦田川以西で北は郷分・山手・津之郷，西は高須・東村・西村・浦崎，南は千年・鞆，それに百島・横島・田島・走島でした。その後，次々と福山市や尾道市に合併され，現在は沼隈郡はありません。

【10】青年団問題を県に直訴

若連中を改善し，青年団を組織する瀧之助の構想は，沼隈郡内で広がりました。これを広島県内や全国へ広めようと考えました。1904 年（明治 37 年）1 月 5 日，瀧之助は，いきなり広島に出向き，山田春三県知事と会うことを試（こころ）みましたが断られ，その足で広島県師範学校校長や中国新聞社の主筆を訪ね，青年団体の組織化について話し，この問題について世論を引き起こしてほしいとお願いしました。翌 1 月 6 日，再び知事を訪問，県当局が青年団体に対し指導奨励（しどうしょうれい）すべきであると資料を示しながら訴えました。これらの瀧之助の行動の成果は，すぐに具体化しました。同年 1 月 21 日付の中国新聞は，弘瀬時治（ひろせときはる）県師範学校校長の「地方の青年教育について」の談話が載（の）せられたのに続き，翌 1 月 22 日には，「地方青年の自覚」の記事が載せられました。さらに 1 月 26 日には，中国新聞社の竹岡風狭（たけおかふうきょう）主筆が書いた「若連中の啓発」の記事が掲載されました。これを目にした瀧之助は，日記に「黒幕 (注) ここにあり」と記しています。

さらに，国家中央へ青年問題について提起したいと考えていた瀧之助に，チャンスが巡ってきました。4 月 26 日，内務大臣芳川顕正（よしかわあきまさ）が地方巡視で広島に来ることがわかり，風呂敷（ふろしき）にたくさんの資料を包み，松永駅から一番列車で広島へ出向きました。内務大臣には会えませんでしたが，同行の井上友一（いのうえゆういち）書記官と 1 時間半にわたって話をすることができました。これは，阿武沼隈郡長の計らいがあったから面会することができたのです。

（注）黒幕：陰にあって指図する人

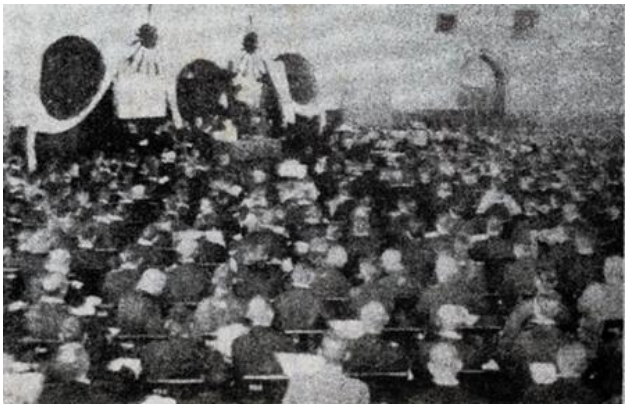
【11】内務省や文部省を動かす

井上書記官との面談では，広島県内で青年団体が夜学会（注）を開催し，幅広い活動をしていることを資料を示しながら説明し，国として統一的指導の必要性を進言しました。その内容が内務大臣に報告されたと見え，1905年（明治38年）9月29日付の内務省地方局長名で各県知事宛に「模範となる青年会の組織・事業などについて調査報告するよう」と通達が出されました。また，翌年7月には『地方自治と青年団体』の小冊子が全国の郡長宛（あて）に配布されました。こうした動きは，瀧之助の熱心さに加え，日露戦争をきっかけに国が青年団体の発展のために何をなすべきかを考えるようになったからです。

一方，文部省は，1905年（明治38年）第5回全国連合教育会に「補習教育の普及発達を図（はか）る最も有効な方法」について意見をたずねることになりました。広島県からは，小学校教員の瀧之助が代議員に推薦（すいせん）されました。会議は，8月5日から3日間，東京で開かれました。瀧之助は，「国は若連中を再編成し，新しい青年団体を組織すること。青年団体が今着手すべき事業は，夜学会・文庫の設置・演説会・共同作業」などと説明し，「国は地方における青年団体の指導をすべきである。」ことを提案しました。瀧之助の提案は全面的に取り上げられ，以後，文部省は青年団の組織化や活動に前向きに取り組むようになりました。

（注）夜学校：農作業がひまな時，夜間開かれる学校での勉強会

【12】全国青年大会名古屋で開かれる



名古屋本願寺別院での全国青年大会

1907 年（明治 40 年）沼隈郡青年大会を成功させた瀧之助は，全国の青年たちが一同に集まる大会の開催を望みました。そのチャンスは意外にも早くやって来ました。

1910 年（明治 43 年）名古屋で関西府県連合共進会が開かれることになり，これに沼隈郡の青年会の活動報告を提出し，同時に青年大会を開催することを沼隈郡青年会役員会で決めました。同じころ，愛知県でも共進会に合わせ，全国青年大会を開くことを県青年大会で決めました。東西相呼応（とうざいあいこおう）して全国青年大会を名古屋で開くことを決定していますが，これは，沼隈の指導者山本瀧之助と愛知の指導者山崎延吉（やまさきのぶきち）との間に密接な交流･連絡があったからです。

4 月 26 日に名古屋の本願寺別院を会場に開かれた日本で最初の全国青年大会へは，阿武信一（あんのしんいち）郡長を団長に，沼隈青年会員は，松永駅から臨時列車を仕立て，参加しました。

大会では，山崎延吉の司会で進められ，文部大臣・内務次官・愛知県知事の祝辞があり，阿武郡長のあいさつに続き，司会者が，突然「20 年以上も全国青年団体発展に力を入れられた山本瀧之助さんを紹介します。」と述べ，彼の功績をたたえ，感謝のことばを贈りました。瀧之助は壇上で，「今後も努力するつもりです。」と決意を述べ，大きな拍手が起こりました。

会場には，全国から集まった，1900 人余りの青年たちの中に 412 人の沼隈郡青年会員の顔がありました。この時の様子は，名古屋新聞に「異彩を放てる沼隈郡青年会」の副見出しを付けて報じられています。

阿武信一 沼隈郡長

【13】「足のある学校」の訓導兼校長

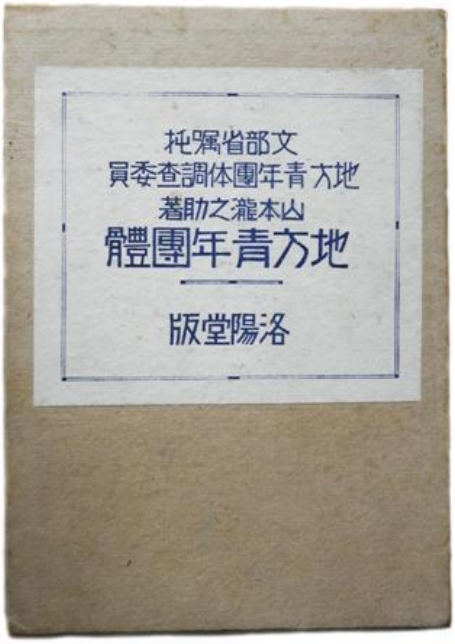
名古屋での全国青年大会を終えて帰宅した瀧之助に，ひとつの転機がやってきました。それは，阿武郡長より新設の郡立実業補習学校の講師になってほしいとの依頼でした。彼は，20 年以上も勤めた小学校を辞めることに未練もありましたが，辞表を出し，1910 年（明治 43 年）9 月，36 歳で実業補習学校巡回講師となり，翌年には訓導（くんどう）兼校長辞令を受け，いよいよ青年教育に全力を傾けることになりました。

この学校は，デンマークの巡回学校にヒントを得て阿武郡長が考案したもので，郡内の小学校の教室を借りて，夜間に小学校を卒業した青年たちのための授業を行う巡回学校で，「足のある学校」とも呼ばれていました。修業年限は 6 週間でしたが，農閑期に巡回するため，1 町村では 1 年間に 1 週間程度で，全部修了するには 6 カ年必要でした。

授業内容は，修身・農業・その他で，修身は公民教育で，1916 年（大正 5 年）より瀧之助編の『町村自治要義（ちょうそんじちようぎ）』をテキストに使いました。農業は産業教育で，農業技術の指導を行いました。その他，有識者を講師に教養を高める内容もありました。

1 年間 1 週間程度の授業の間を埋めるため，折々に講習会を開催したり，印刷物（『親と月夜』の本）を配布しました。また，巡回文庫の図書の閲覧（えつらん），巡回日記（1 カ月間で一巡し，読んだ人が感想を書く欄（らん）がある）など工夫されていました。この巡回する郡立実業補習学校は 1921 年（大正 10 年）3 月まで続けられ，やがて山南尋常小学校の校舎の一部を使用して固定化するようになり，これを機に瀧之助は退職しました。

【14】『地方青年団体』の出版



『地方青年団体』の本は，1909 年（明治 42 年）瀧之助 35 歳の時に発刊した 3 冊目の本です。この本は，これまで『吉備時報』などで述べた青年教育論や指導法などを 1 冊にまとめたもので，青年団体の指導者向けに書いた瀧之助の代表的な本の一冊です。

青年団体の機能は，小学校教育の延長上にあると位置づけ，青年教育の根本原理として次の 4 綱領を考えています。

その第一は「体育」で，健康に関する正しい知識を得ると共に，相撲・射的・徒歩の励行を奨めています。

第二は「道徳教育」で，「孝行」を重視しています。

第三は「町村民教育」で，愛郷心と愛国心を育てることと農業知識の学習をあげています。特に道路改修・荒地開拓・消防活動などの団体活動を通じて質実剛健・犠牲の精神を育てることをねらいています。

第四は「補習教育」で，主として夜学会で生活に役立つ学習を重視しています。例えば，教材として新聞や誤字のある葉書を使っています。また，講話会の開催や先輩訪問などを行うことを勧めています。

指導者向けに書かれた本ですが，予想を超える 3000 部以上も売れました。これは，内容が優れていたからです。この本は小松原文部大臣に贈られ，大臣から「青年団体盛ナラントスル時期ニ際シ，頗ル適当ナ著作」と礼状が届きました。瀧之助はよほどうれしかったと見え，これを額に入れ，自宅に保管していましたが，今は福山市沼隈図書館の瀧之助記念室に展示されています。

（注）綱領：大切な項目

【15】指導者にとってヒント満載の本

『地方青年団体』の本で，瀧之助はいろいろ提案していますが，そのいくつかを紹介します。

青年団体の活動の拠点として,「倶楽部」を設置すべきであるとしています。「倶楽部」は青年たちの共同生活の場であり，娯楽の場であり，ここでの交遊で集団意識と連帯意識が育つとしています。また,「倶楽部」は新設の必要はなく，神社・寺・旧校舎の一部を利用したり，教員住宅や消防ポンプ庫に附設するのも良いと述べています。現在，旧沼隈郡内の多くの集会所を「倶楽部」とか「クラブ」の名で呼んでいますが，その語源は瀧之助が提言した青年たちの施設名に由来すると考えられます。

「青年団体の娯楽」についていろいろ紹介していますが，その一つに瀧之助が考案した「常識カルタ」があります。これは，青年たちが身につける社会常識や公衆道徳など，遊びながら知識が得られると人気があり，1910 年（明治 43 年）100 組をセットにして市販しました。

青年団体の事業として「養老会」の開催を提案しています。「年 2 回ぐらい老人を招待し,児童に唱歌などを歌わせ,その後，茶菓子を出して談話する。」内容から見ると現在の敬老会にあたります。他の記録によると，1906 年（明治 39 年）に宝田院で養老会を行ったとあります。

巻末に「青年団雑話」50 話が収録されています。その中には「青年実行百箇条」「団結と巡回日記」「小形の座右銘」など，青年団体指導者にとって大きなヒントとなる事柄がたくさん掲載されています。

養老会の様子

【16】月刊雑誌『良民（りょうみん）』

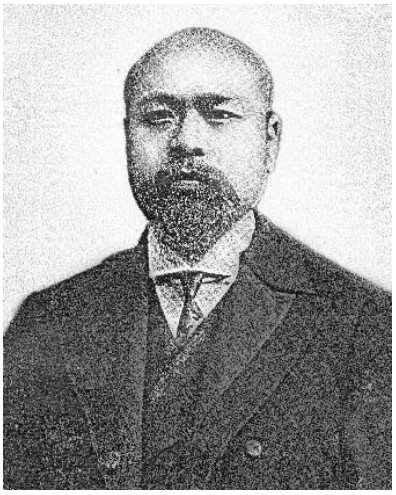
表紙の絵に YUMEZI のサインが見える。

1909 年（明治 42 年）の『地方青年団体』の発刊，1910 年（明治 43 年）全国青年大会で瀧之助の功績を紹介されたことなどを通じて，青年指導者としての名は，全国で知られるようになりました。

おりしも，1910 年（明治 43 年）11 月，東京で開かれた第 3 回感化救済事業講習会に出席した瀧之助に，井上友一参事官から中央報徳会が発刊を計画している『青年斯民（しみん）』の創刊号の原稿を書くよう依頼されました。ところが，原稿が出来上がった時，突然，事情があって発刊が中止されたことが知らされました。せっかくの原稿を没（ぼっ）にするわけにいかず，以前『地方青年団体』の出版に関わった，今津出身の洛陽堂（らくようどう）主人河本亀之助に相談したところ，雑誌名を『良民』とし，出版することを引き受けてもらいました。

当時，地方に住む青年たちが読む雑誌があまりにも少なかったため，地方青年のための月刊誌『良民』を 1911 年（明治 44 年）から約 9 年間，瀧之助が編集を一手に引き受けて発刊しました。この雑誌には，冒頭に「実行」という欄を設け，瀧之助の考えを毎月書きました。青年論を完成しつつあった瀧之助にとって，自分の主張を発表する場を持つことは，青年団体への指導法を築き上げるのに大きな力となりました。

『一日一善』『模範日』『早起』『団体訓練』などの瀧之助の本は『良民』の発刊中に出版され，『良民』の中でこれらの本の内容がしばしば紹介されました。『良民』は，河本亀之助が職を退いたことにより，1919 年（大正 8 年）12 月号で廃刊となりました。なお，初めの 2 年間，当時無名であった竹久夢二のさし絵が使われていますが，これは夢二と深い関係にあった河本亀之助が依頼して書かせたものです。


河本 亀之助

【17】二万四千部のベストセラー『一日一善』

瀧之助が著(あら)わした本は 14 冊ありますが，その中で最も多く読まれたのは，1913 年（大正 2 年）彼が 40 歳の時に出版した『一日一善』です。当初は，「子どもだまし。」「一日一膳(いちぜん)では腹もふくれん。」などの批判の声がありましたが，瀧之助は気にしませんでました。

この本では，青年たちが自主的に取り組む事例として，「一日に少なくとも一つ善いことを行う」ことを提案しました。「庭を掃(は)いた。ついでに前の道を少しばかり掃いた。」など，一日一善の実例や「けんかをとめた。」という小学生の一日一善，ほかに，役所・銀行・工場内などの一日一善の実例 552 例を載せています。

「一日一善」の発案のヒントは，広島高等師範学校 北條時敬校長の講演で，イギリスのボーイスカウトの 3 つの誓いのひとつに，「一日一善」があると聞いたことによると言われています。ところが，1897 年（明治 30 年）2 月 3 日，瀧之助 23 歳の日記に「一生の目的は善をなすにあり。」とあり，早くから心に秘めていた信念であったことがうかがえます。

『一日一善』の出版を機に，全国各地で「一日一善の会」が次々と誕生，国民的運動にまで広まりました。

福山市沼隈図書館の山本瀧之助記念室に展示されている「一日一善発祥之地(はっしょうのち)」の額は，石黒忠悳(いしぐろただのり)から贈られた書です。この書こそ，瀧之助によって沼隈の地から「一日一善」が全国に発信したことを証明する貴重な資料と言えます。

福山市沼隈図書館の山本瀧之助記念室に展示されている額

【18】『模範日』・『早起』の出版

『一日一善』が日常生活に定着できるよう，1914 年（大正 3 年）『一日一善日記』を，1916 年（大正 5 年）『実践一日一善講話』を出版しました。また，1915 年（大正 4 年）には，瀧之助の経験を語った『青年修養着手の個所』を著わしました。この本は，青年が自己修養にどこから着手すべきかを理論ではなく身近な実例をあげて書いています。

瀧之助は，さらに自己を高めるための実践的な本を書き続けました。1917 年（大正 6 年）『模範日』を，1918 年（大正 7 年）には『早起』を出版しました。『模範日』とは，「一と月の中で予（あらかじ）め自分で日を定め，その日を最も理想的で最も充実した日にしよう。」というもので，大変な決意と努力を必要としましたが，これを身につけると大きく成長できるものでした。『早起』は 3 つの意義があるとし，「時間の開墾」（1 時間の早起は 1 年で 15 日間を生み出す）　「1 日を充実させる」「その質を善（よ）くする」としています。また，エジソンや吉田松蔭（よしだしょういん）など古今東西の偉人が残した早起に関することばや教訓などを紹介したり，各地の早起会の紹介をするなど，さまざまな早起に関する情報を提供しています。『早起』の本は 1 万部を越えるベストセラーとなりました。これらの本は，河本亀之助が経営する洛陽堂から出版しています。

その後，『団体訓練』『少年団研究』『処女会の育成』『幹部の修養』『我が家の愛称』と，次々に発刊しました。

【19】「全国巡回青年講習所」開設に向けて

沼隈郡立実業補習学校の巡回講師兼校長として沼隈郡内の青年たちを指導する瀧之助に，全国各地からの講演の依頼があり，忙(いそが)しい日々を過ごすようになりました。しかし，これらの講演がその場限りのものであり，あまり効果があがっていないと感じた瀧之助は，自分で講習所を開設し，全国の青年たちと数日間を共(とも)に過ごし，青年を直接指導することはできないものかと考えるようになりました。

その第一歩として，小学校を卒業した者の中から選んだ若者を対象に，宿泊講習を実施しました。1917 年（大正 6 年）沼隈郡能登原村(のとはらむら)（現福山市沼隈町能登原）磐台寺(ばんだいじ)へ沼隈郡内から 37 人の青年を集め，12 月 15 日から 5 日間，さらに翌年 2 月にも熊野村（現福山市熊野町）常国寺(じょうこくじ)で 5 日間の宿泊講習会を開きました。これらは，瀧之助晩年の大事業である「全国巡回青年講習所」の開設にあたり，その講習内容や運営に関しての手掛りをつかむための実験的な講習会でした。1919 年（大正 8 年）5 月 15 日の日記に「優良児童後始末　専門家として立たんとする」とあり，いよいよ講習所開設の決心をしたと読み取れます。

準備万端整(じゅんびばんたんととの)えてことを起こす瀧之助は，その後も市長・郡長・師範校長などと意見を交わし，きめ細かな計画をたて，1923 年（大正 12 年）12 月にやっと，青年講習所の構想を固めました。

講習所を開設するにあたって，解決すべき課題がいくつかありました。そのひとつは経費，もうひとつは後援の問題でした。経費については，福山義倉財団(ふくやまぎそうざいだん)から 280 円の補助金を受けられるようになりました。後援については，以前から知友であった大阪毎日新聞社の記者橋詰(はしづめ)せみ郎(ろう)の尽力(じんりょく)により，本山彦一社長の協力を得ることができました。こうして 1924 年（大正 13 年）2 月 7 日から 10 日間，福山市北吉津町胎蔵寺(たいぞうじ)で，第 1 回講習会を開くことになりました。

【20】120 回の「全国青年巡回講習会」

車座になっての講習会

瀧之助が主催した第 1 回の青年講習会の参加者は，17 歳から 24 歳までの男子 44 人。そのほとんどが農家出身で，尋常小学校を卒業した者，あるいは，さらに 2 年程度の高等科で勉強した者で，中等学校卒業生は 1 人もいませんでした。そもそも，この講習会の目的は，家庭の事情で中等学校に進学できなかった青年たちに教育の機会を与え，町村の青年団の幹部を養成することにありました。瀧之助が歩んだ青年のころの跡を歩ませたくないという思いと，彼が沼隈郡で行った夜学会や実業補習学校の経験から考え出した講習会でした。

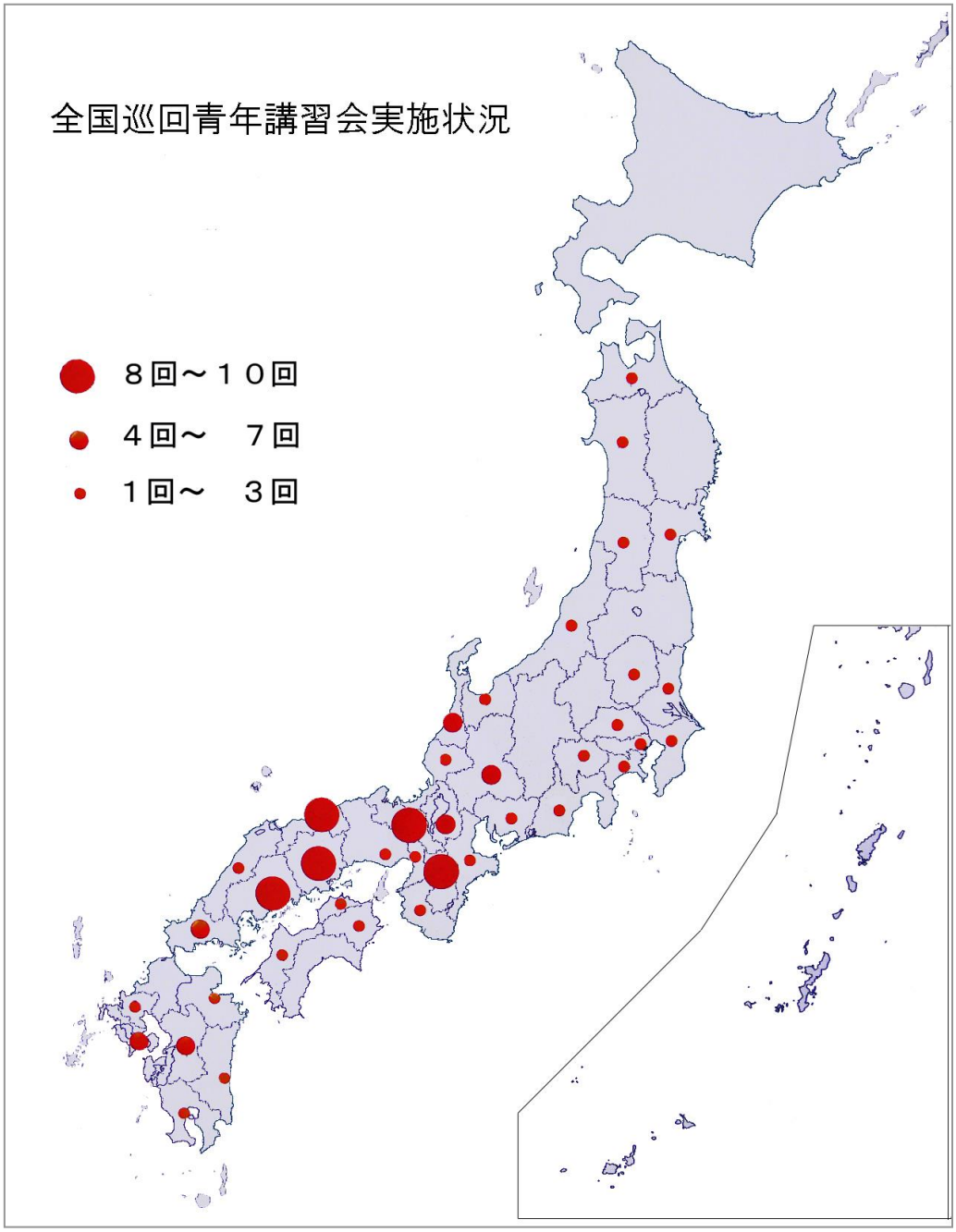
講習会は，2 日から 10 日間の宿泊講習で，1930 年（昭和 5 年）2 月まで 120 回，年間約 20 回のペースで，全国を会場に続けられました。第 1 回目は，瀧之助が立ち上げた「青年講習所」（2 回目から「巡回青年講習所」に改める）が主催し，2 回目から各府県が主催者に加わり，第 16 回から財団法人日本青年館も主催者に加わりました。

福山市北吉津町胎蔵寺の第 1 回
青年講習会の参加者たち

講習内容は，国民精神・地方自治・農業問題・郷土史などの一般教養のほか，新聞記事の読み方・電気の話・時事問題など実用的なものも行いました。また，時には，当時まだ珍しかった活動写真（映画）の上映もありました。講師は，師範学校の校長や中等学校教諭, 寺の住職などの地元講師のほか, 外部から各分野の専門家を招きました。第 2 回の講習会では，作曲家山田耕作を招き「音楽の聴き方, 歌い方」の講演を聴いています。

主催者であり常任講師である瀧之助は，いつも質素な詰襟服を着，きちんと正座し，青年たちを車座に座らせ，過ぎし日の悩み多かった青年時代のことを淡々と話しました。難しい言葉は使わず，人間の価値や生き方について熱心に話しました。また，手紙のやりとりをすることを勧め，彼自身も教え子から来た手紙

は，必ず返事を書きました。毎週のように来る同一人物からの手紙にも必ず返事を書いたということです。悩みに対しても親身（しんみ）に耳を傾け，勇気付けるアドバイスをしました。こうして，この講習会を通じ，深い師弟関係（ていかんけい）を持った青年は，5,000人を超え，日本各地で青年団のリーダーとして活躍し，瀧之助が当初ねらった通りの成果をあげることができました。



【21】同窓会と『青年の天地』発行

瀧之助は，数日間寝食を共にした講習会が一度限りの交わりでなく，その後も末永く交友が結べることを願って青年講習所同窓会を作りました。会員は，相互に文通で情報を交換させ，青年同志の結びつきを強めました。同窓会は，「足はどこまでもふるさとの土をふみ，頭は町村外に友を求め，他府県にも同志を持つこと」を考えていました。

同窓会員には，10 ページの『会報』を無料で配布しました。『会報』には，講習会参加者名（これが同窓会名簿となる），講習内容と共に会員の声や瀧之助の感想・主張が綴られています。『会報』は，10 号までは不定期の雑誌でしたが，11 号からは『青年の天地』と題をあらため，毎月 15 日に発行しました。ページ数も 16 ページから 20 ページに増やし，購読料を徴収するようになりました。編集・発行は，瀧之助が講習会の運営，準備に多忙なため，代わって大阪毎日新聞社事業部（橋詰せみ郎部長）が行いました。1929 年（昭和 4 年）5 月から翌年 3 月 15 日の最終号までは，瀧之助が編集，発行を行いました。

『青年の天地』には，瀧之助が講習会で話した内容が時に出てきます。「道を訪ねられたので丁寧に教えてあげた。この丁寧は，いわば余計なことで，この丁寧なこと，しなくてもよいことを付けたすことが一善になる。」と解説しています。また，日常生活の感想として，「『はい』という返事は，まことに大切なことである。この『はい』という返事をする心がけがあると，世の中は潤される。」など，心がけたいことがたくさん紹介されています。

巡回青年講習所の同窓生は，瀧之助の遺志をついで 1933 年（昭和 8 年）『若鷹』を 5 年間 20 号まで不定期に発行し続けました。戦後の 1960 年（昭和 35 年）「山本瀧之助を偲ぶ集い」を持ち，1976 年（昭和 51 年）から 1987 年（昭和 62 年）まで『続 青年の天地』を年 1 回発行しました。同窓生たちは手紙で絆を強め，瀧之助はその死後も，師であり，父であり続けました。

【22】『山本瀧之助全集』と「頌徳碑」

山本瀧之助胸像

瀧之助が 56 歳になる直前の 1929 年（昭和 4 年）11 月 10 日の日記に「10 日より上京　帰る途中から歯痛　発熱骨膜炎　入院　コンナ事で」と，仕事半ばで入院したことの無念さを書いています。

瀧之助の病状回復が困難であると判断した日本青年館は，1930 年（昭和 5 年）11 月，「山本瀧之助氏功労顕彰会」を作り，胸像の制作と『山本瀧之助全集』(注) 発刊事業を進めることを決めました。

一方，地元でも同年 12 月，もと沼隈郡役場の職員であり，郡青年会の書記を務めたことのある村田静太郎（露月）が発起人となって「山本瀧之助頌徳会」を発足させ，頌徳碑の建設と『山本瀧之助言行録』を出版することを決めました。

瀧之助の胸像は，日展審査員の雨宮治郎が制作，一体は 1931 年（大正 6 年）4 月 4 日，日本青年館で除幕され，もう一体は生家に贈られました。（この像は現在福山市沼隈図書館の山本瀧之助記念室入口に設置されています。）

瀧之助はその年の 10 月 26 日，草深の自宅で 57 歳 11 か月の生涯を終えました。瀧之助が待ち望んでいた『山本瀧之助全集』の発行は同年 12 月 15 日で，瀧之助が目にすることはできませんでした。

頌徳碑は，かつて青年講習会を試験的に行った阿伏兎磐台寺の参道に建てられ，1935 年（昭和 10 年）5 月 19 日に除幕されました。碑の題字は，松永尋常小学校での教え子であり，大日本連合青年団理事の丸山鶴吉が書き，碑文は，同青年団理事長，田沢義舗が撰文しています。碑文に「ソノ全生涯ヲ通ジ　ソノ全精力ヲ挙ゲテ　我ガ国　青年団運動ノ為ニ捧ゲラレタリ　ソノ今日ノ興隆ヲ見タルモ全ク先生ノ功績ナリトイウモ過言ニアラズ」と記しています。なお『山本瀧之助先生言行録』は同年 12 月に出版されました。

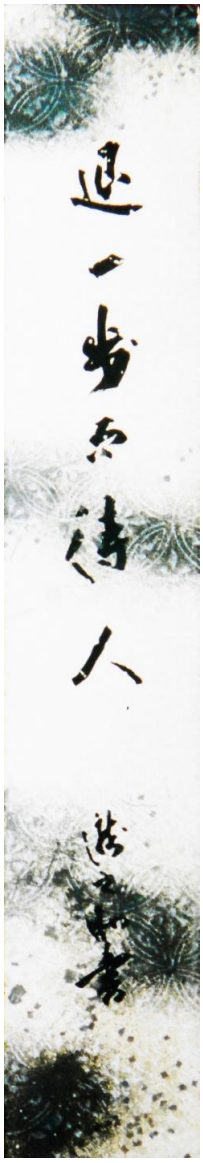
（注）『山本瀧之助全集』：山本瀧之助の著書 14 冊の内，『田舎青年』『地方青年団体』『模範日』『早起』『少年団研究』『一日一善』『青年修養着手の個所』『幹部の修養』など 11 冊を収録。

【23】瀧之助が残したことば

青年たちに話す山本瀧之助

瀧之助は，その著作活動や講演・講習活動などで多くのことばを残しています。「均しくこれ青年なり」「一日一善」「己に克てよ」については，すでに述べています。ここではそれ以外について述べます。

「退一歩而待人　進一歩以当事」これは瀧之助唯一の座右の銘です。講習でもしばしば話していますが，



1926年（大正15年）11月号，12月号の『青年の天地』では，「一歩退は人を容れる心情，事に当っては一歩前進したい，『いざ』『何のその』という意気が大切である。」つまり，人に接するにあたっては寛容の心。事に当っては前進の意気込みが大切であると解説しています。

「一荷合力」ということばは，常石に古くからある習慣で，家の新築に際し，近所の人々が船で運ばれて来た瓦を工事現場まで天平棒で運び込む相互扶助（助け合い）作業のことです。瀧之助は，1906年（明治39年）の「常石時報」という新聞の投稿記事に「青年のみなさんは，この『一荷合力』の心をもって会のためにつくしてはいかがでしょう。」と提案しています。瀧之助が指導した沼隈郡の青年活動では，地域や村のために多くの奉仕作業を行っていますが，ここには「一荷合力」の精神が活かされています。また，福山市が提唱する「協働のまちづくり」も実は，この「一荷合力」に由来しています。

「学び続けたら君の人生は輝く」講習会でしばしば話したことばです。瀧之助は青年巡回講習会で，自分の歩んだ人生を語り，学ぶことや努力の大切さを話しました。これによって勇気付けられ，奮起し，将来への希望を抱いた青年は多くいます。瀧之助のことばは，どれも彼の人生経験から生まれたことばであり，時代を越えて現代にも通用するものばかりです。

瀧之助直筆の短冊

＜資料＞

山本瀧之助の思い出と瀧之助の手紙

山本先生と私

私と山本先生との出会いは，昭和２年８月比叡山において第２回先進青年講習会が開かれた時のことであった。（略）……講習は２泊３日で，先生の講義は気合の入った他の講師と異なり，難しい言葉もなければ雄弁（ゆうべん）でもなく，それかといって不思議に眠気（ねむけ）の起こらないお話であった。時々うちの村でも，うちの友だちや青年もそうだと共感するところが多かった。……（略）

滋賀県　今井清右衛門

恩師を偲んで

山本先生に初めてお会いしたのは大正15年10月２日～5日までの４日間，奈良県長谷寺で県下の処女会の幹部講習会に出席させていただいた時でした。(略)……閉講式でお別れに際し「皆さんからのお便りを待ちます」とおっしゃいました。わずか４日間お世話になった先生でしたが，別れることが悲しくてなりませんでした。お言葉に甘（あま）え，それ以後，先生にお便りを出しました。先生は，お忙しいお身でいらっしゃいますが，いつも毛筆でお返事を下さいました。私はうれしくなって，お返事をお守りとして身に付けておりました。其の後も，わたしは，人生の歩む道，つまり私の歩む道についてご相談申しあげました。……（略）

ある日のお便りに「勉強は学校だけのものではありません。女学校だけが勉強の場ではありません。勉強は生涯続けるものです。女学校へいけなくても通信教育で勉強しなさい。」とありました。私は，嬉（うれ）しくなって早稲田大学出版部の女学校講義録を早速取寄せ，送られてきた講義録を一生懸命に読み書きしました。私の心の内が晴れてまいりました。（略）

奈良県　西田和子

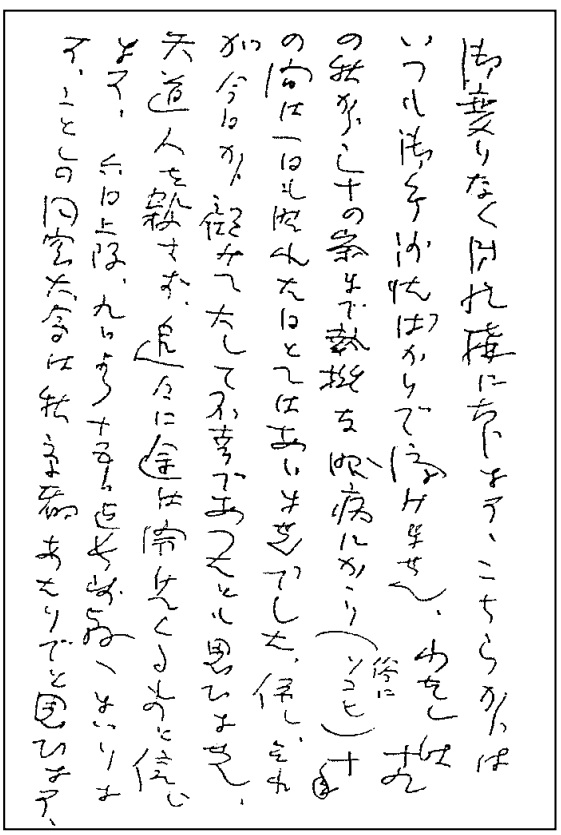
山本瀧之助回顧

先生との出会いは大正３年２月 15 日，先生５３歳，私１９歳だった。一日の休みを母からもらって出席したが，多くの友は宿泊しこれからが楽しい夜の懇談会と言うのに，私は一人しょんぼり帰らなければならなかった。

先生は堀端（ほりばた）まで送って出られ「もう帰るのか　こうしてお会いするのも不思議な縁ですなあ　次にお会いするのはいつでしょうか。帰ったらお手紙ください。」と言われた。「難しい理論はさておいて，人と交わることが人生の第一義です。手紙は人と交わる唯一の方法です。手紙は相手のことを思わないと書けぬ。来た手紙にはすぐ返事を出すようにしたい。一枚の手紙が，どんな新天地を展開させるかも知れない。」と先生は，自宅から講習会場から，日本青年館からせっせと手紙や葉書を書かれた。

私は先生に１週間に１度は手紙を出した。家庭，将来のこと，いろいろの悩みを相談した。先生から必ず返事がきた。（略）

山口県　屋祢本正雄



御変わりなく御結構に存じます。こちらからはいつもご無沙汰ばかりで済みません。わたしは十九の秋から三十歳まで執拗な眼病にかかり(俗にソコヒ)十年の間は一日も晴れた日とてはありませんでした。併し、それが今日から顧みてたいして不幸であったとも思いません。天道人を殺さず。追々に途は開かれるものと信じます。六日上阪，九日より十五日迄長崎県へまいります。ことしの同窓大会は秋京都あたりでと思ひます。

【解説】このはがきは、瀧之助からの返事です。大正十四年六月の第十四回講習会の教え子である京都府の西田誠宏さんへ宛てた昭和三年五月四日消印のものです。自分の体験を例にあげはげましています。

山本瀧之助年譜

（ **太字**は本･雑誌の出版 ）

1873(明治 6)	沼隈郡草深村（現沼隈町草深）で山本孫次郎・サダの長男として出生
1880(明治 13)	草深小学校卒業後中学校進学をあきらめる
1888(明治 21)	日記を書き始める
	役場雇となる
1889(明治 22)	第 14 尋常小学校（現千年小学校）雇となる
1891(明治 24)	松永尋常小学校授業生となる
1892(明治 25)	常石尋常小学校訓導となる
1894(明治 27)	千年少年会設立
1896(明治 29)	**田舎青年**
1898(明治 31)	**地方青年**
1901(明治 34)	五百木良三の誘いで上京
1902(明治 35)	石黒忠悳と知遇を得る
	東京より帰郷　常石尋常小学校へ復職
	雑誌　**吉備時報**（1912 年まで）
1903(明治 36)	千年村青年連合会設立
1905(明治 38)	常石尋常小学校訓導兼校長となる
1906(明治 39)	千年村処女会設立
1907(明治 40)	第一回沼隈郡青年大会を今津河原で開く
1909(明治 42)	**地方青年団体**
1910(明治 43)	全国青年大を名古屋で開催
	郡立実業補修学校講師嘱託
1911(明治 44)	郡立実業補修学校訓導兼校長
	雑誌　**良民**（1919 年まで）
1912(大正 元)	青年団に関する調査委員文部省嘱託
1913(大正 2)	**一日一善**
1914(大正 3)	鉄道講和開始（30 回以上）
	一日一善日記

1915(大正 4)　**青年修養着手の箇所**

1916(大正 5)　**実践一日一善講話**

1917(大正 6)　**模範日**

1918(大正 7)　**早起**

1919(大正 8)　一夜講習会提唱

　　団体訓練

1921(大正 10)　**少年団研究**

1923(大正 12)　**処女会の育成**

1924(大正 13)　全国巡回青年講習所を開設

　　幹部の修養

1926(昭和　元)　雑誌　**青年の天地**（1930 年まで）

　　日本青年館評議員　同事務嘱託

　　我が家の愛称

1928(昭和 3)　勲 6 等瑞宝章受賞

1930(昭和 5)　文部大臣表彰・広島県知事表彰

1931(昭和 6)　日本青年館において胸像除幕式

　　自宅において死去

1935(昭和 10)　頌徳碑を阿伏兎に建立

山本瀧之助頌徳碑

（福山市沼隈町阿伏兎磐台寺参道）

発行年月日　２０１３年（平成２５年）２月１０日

発　行　者　山本瀧之助に学ぶ会実行委員会

執筆・編集　山本瀧之助研究会

この教材は福山市協働のまちづくりキーワードモデル事業の助成を受けています。